

# 自立（律）と共生のスタイルをもとめて

岡田真美子

「人類文化史の大きな変革期は環境がよいときではなく、むしろ環境が悪化したときに起こっている。」<sup>1</sup>

「気候悪化による社会的混乱と危機が、新たな技術革新を生み出す契機となり、あらたな生業や社会のシステムが生み出された。」<sup>2</sup>

## 1 変革のチャンスが来た

自然災害の増大、高温化（温暖化というような穏やかなものではない）が年々わたくしたちの生活を脅かす度合いが増している。環境に関する問題は日を追うごとに深刻化するばかりである。しかし、冒頭の言葉のように、かつてもわたくしたちの祖先は環境に大きな変化が起きた時にこそ、知恵を巡らせ、幾たびもの危機を克服し、それをバネに創造的な仕事をしてきた。とはいえ、危機になれば勝手に新しい政策・技術が生まれるというものではない。技術も生業も、社会システムも、わたくしたち自身が創り出さなければならないのである。<sup>3</sup>

かつて伊東俊太郎博士は、人類文明には人類、農業、都市、精神、科学革命による5つの画期があったことを示し、現在われわれは第6の変革のときを迎えていることを示唆した。この変革に成功すれば愈々われわれは環境文明の時代を迎えたということになる。

環境文明構築のためにわれわれが見直すべきは「存在の関係性」である。なぜかといえば、環境

問題は関係問題であるといってもよいからである。さまざまな様相を呈しているように見えても、根本的には、存在同士の関係性、あるいはそのバランスに変化が生ずる時に環境問題は起こる。

関係性のバランスを崩すものとして考えられるものに、パワーやエネルギーの一極集中、価値の一元化がある。柔軟性のない中央集権体制にサステナビリティがないことはこれまでの歴史によって証明された。

というわけで、いまやわたくしたちは、環境悪化に打ちひしがれているどころではなく、敢然と変革のための価値創造、関係性再構築に取り組むべきなのである。

## 2 多元的価値の創出—貨幣経済一辺倒に物申す

貨幣価値への著しい依存は、絶えず環境を圧迫し、自然を搾取することにつながる。20世紀の科学技術の進歩は、生活の快適さを追求すると称してさまざまな「便利な道具」を作り出したはずなのに、目論見に反してわれわれが便利な道具の利用によって得たのは、優雅で豊かな時間ではなく、さらなる忙しさと、不健康な肥満と、搾取され貧しくなった自然であった。

現代人は、サステナブルなものは手間隙かけて作られることを忘れ、時間や健康をすべてお金（リアル・マネー）で買えるという幻想を抱いてしまっている。たとえば宮大工西岡常一棟梁（故人）は、千年持続する堂宇は、千年生きてきた「千年檜」で作られるという。お金をかけても、時間

を先に進めたり、元に戻したりすることはできない。早送りすることのできない時間がサスティナビリティのためには必要なのである。

大切にすべきは物質的な豊かさや、お金の蓄積ではなく、豊かな関係性であり、関係性の蓄積である。したがって人生の質を上げるために少しでも多くお金（リアル・マネー）を稼ごうという生活目標は変革さるべきである。そこで重要になってくるのが国家通貨に対する補助貨幣としての地域通貨である。リアルマネーがなくても、生きてゆくためにどのようなことができるのか、つぎに事例を挙げてお話ししてみたい。

### 3 互酬の経済／利他のツール：地域通貨

ドイツの建築家であり、地域通貨の実践的研究者である、マルグリット・ケネディ博士によれば、ユーロ、ドル、円など国家通貨は、貯蓄や投資を通じて、国際間の交易や競争、富の蓄積と再分配を促進するが、同時に一部のものへの利子や配当を指数的に増大させるものである。それに対して、補完通貨である地域通貨は、ユーザーすべてが互いに利益を得る状況を作り出してくれる。たとえば、教育に関する給付の拡大、高齢者の増加にともなう問題の解決、文化的アイデンティティの保護、地産地消の促進、環境に配慮した最短輸送ルートの使用、非再生資源の利用に倫理的な関心を寄せることをうながすことなどである。<sup>4</sup>

実際、地域通貨は与えることによって関係性を結ぶことを行う。その意味で、コミュニケーションツールであるといえる。たとえば、お隣のお年寄りのために冬じゅう雪下ろしを買って出た若者に、春が来て礼金として応分の対価を支払おうとしたところ、若者はこれをよしとせず受け取りを拒んだ。お年寄りは困って、雪下ろしをしなくても済む電気工事を住居に施した。これを若者は再び水臭いと感じた。地域通貨の話が起こったとき、彼はすぐさまそのメンバになることを決意した。地域通貨がお隣と彼を結びつけることを感じたからである。<sup>5</sup>

ケネディ博士によって紹介されたドイツの地方通貨キームガウアーChiemgauer は順調に会員

数を増やし、流通範囲を広げている。2003年230人だった参加者は、2006年末に1800人になり、2008年10月には2600人、637企業に増え、<sup>6</sup>2009年1月11日の時点で292,531キームガウアーが流通している。<sup>7</sup>ユーロとの関係など、今後の地域通貨活動に多くのヒントを与えるものがある。日本でも2008.2.18現在、646件の地域通貨実験の記録があり、<sup>8</sup>金融危機で、マネーゲームが崩壊しつつある今日、ますますその役割に期待が集まるところである。

因みに、筆者は2001年10月より、西播磨地域でInformation & Communication Technology (ICT) を使い、「千姫」という電子地域通貨活動を行ってきた。会員がホームページ上に銘々の地域通貨口座をもち、電子通貨「千姫」をやりとりする<sup>9</sup>のである。2004年12月には、日本学術振興会人文社会科学振興プロジェクト研究及び兵庫県と協働して、地域通貨国際会議を行い、ケネディ博士ら実践者を招待して地域通貨の現在と未来について話し合った。<sup>10</sup>

また2005年12月11日にはスリランカ日本友好協会（サマン・ペレラ代表）と協働して、スマトラ沖地震インド洋津波で被災して1年のスリランカに対し、現地で不足している眼鏡・レンズを4,500個贈呈するというもおこなった。それらの眼鏡・レンズは、新聞社の協力を得ておこなったわたくしたちのNPOの呼び掛けに対して会員・市民たちから寄せられたものである。

これらの事業をわたくしたちはほとんど最低限の現金と、ふんだんにある地域通貨を使って実践してきた。

こういふと、国家通貨はよくないもので、それが起こしたさまざまな問題を地域通貨が解決する、というように聞こえる。しかし、現金（国家通貨）には現金の働きがある。現金には、交換媒体としての機能のみならず、もっと本質的な働きが備わっているのである。それは清算機能をもつことである。環境人間学的にいえば、現金には、（払う人と払われる人の間にある）関係性を切る働きがある。[サービスを行った時に現金を渡されると「水臭い」と思うのはそのせいである。]

関係性を清算する現金と、関係性を結ぶ地域通貨はともに社会において不可欠の要素であって、両者をバランスしつつ用いることがこれからの社会の在り方であろうと筆者は考えている。以上は価値システムの多元化に向けての方策のひとつの例である。

#### 4 Web2.0ネットワークの創出—地域 SNS が広がる世界

実は NPO 法人千姫プロジェクトの「掲示板」(BBS) はその後、休眠状態である。なぜか？ さらに強力な関係性創出ツールが見つかって、主力メンバはそちらの HP で連絡を取り始めたからである。すなわち最後の話題「地域 SNS (Social Networking System)」である。

科学技術の進歩は、存在間の物理的距離を縮めた。そのため、「世界」(物理的空間) は狭くなったが、一方で「世間」(人的にかかわりのある範囲) は広がったといえる。

「狭い世間」は、窮屈であると同時に、高い信頼性に支えられた社会システムであった。今われわれは「広がった世間」対策を必要としている。そのひとつとして、20 世紀の終わりに、トップダウンの中央集権システムに代わるものとしてボトムアップの「並列分散ネットワーク」が脚光を浴びたことがあった。しかし、現実はこのシステムで NPO 活動を試みたところ、単純にばらばらに横並びであるシステムからボトムアップで実際に機能する社会システムは育ちにくいことを知ることになる。アイデアが自発的に沸くことはまれであり、また単純並列分散システムでは「責任」が不明確になるからである。

環境の問題を考えると、「権利と義務」のみでは事は済まず、「責任」の所在を明確にしておく必要がある。そこでわれわれが考えたのは、華厳哲学の「重々無尽の帝網」と情報科学でいわれる Web2.0 ネットワークをベースとし、さらにそれを 3D のレベルでとらえた「セーフティネットワーク」である。

「重々無尽の帝網」とは、天帝釈の宮殿を飾っている宝網のことである。これは宝玉を金糸銀糸

が結んで編んだものである。宝玉同士が相照らしあってその輝きは元の玉よりはるかに美しい。この宝玉を一々の人やパソコン、情報用語でいうノードと見、また金糸銀糸を関係性、リンクであると考えるイメージである。

また Web2.0 ネットワークは 2004 年、オープンソース運動の代表的な推進者であるティム・オライリーが提唱したシステムである。Web2.0 では、発信した一つ一つの記事に対して、読者が新しい情報を付け加えたり、修正したり、ほかの情報とつないだりするといった編集をおこなうことができ、そこに双方向のコミュニケーションが発生する。このように記事の受け手が参加して、情報を検索・受信・発信・共有をすることにより、情報が循環して蓄積されていく。これまでのようにデータやサービスを多くの人に提供するだけでなく、そこに不特定多数の人間が能動的に参加できる環境を公開することで、サイト自身が成長していく構造になっており、「ユーザを巻き込む自由参加型のスタイル」が Web2.0 の本質であるといえる。<sup>11</sup>

3D といったのは、ネットワークの構成メンバ同士が平面的につながっているのではなく、時にはあるメンバを頭にその下にヒエラルキーを形成し、またあるときは別のメンバを頭にぶら下がる、というヘッド交代型の立体構造であるからである。

これは決して夢物語ではなく、実際に地域 SNS は動き始めている。2006 年 9 月、102 名で試験運用が始まった地域 SNS ひよこむ(創設管理者:和崎宏)はメンバ数 4,684 人(2009.1.11 現在)となり、コミュニケーション累計は、2009 年 1 月 7 日 1,000,000 件を超えた。2006 年にインフォミアム社(本社姫路市)で開発された地域 SNS ひよこむの SNS エンジン、Open SNP と呼ばれ、全国 25 拠点(2009 年 1 月現在)の地域 SNS が採用するところとなっている。

2007 年から地域 SNS ひよこむには電子地域通貨システムが実装された。さらにこれが他の地域通貨と連動することになれば、現金のみの経済システムから、より豊かな温かい社会システムが誕

生するだろう。

このように自律的に活動するメンバ同士が 3D ネットワークに結ばれて協働するすがたは、これからの新しい社会構造の在り方を予見させる。さらに、このネットワークがこれまでにない結合空間を創出して共生のコミュニティとなる時、地球生命システムはまた一歩進化を遂げることだろう。これが冒頭で述べた安田博士の言う、気候悪化による社会的混乱と危機がうみだした新たな技術革新となり、伊東博士の示唆した第 6 の変革をのりきるツールのひとつになることを祈るものである。

#### 注

1. 伊東俊太郎「文明の画期と環境変動」『講座 [文明と環境] 2 地球と文明の画期』朝倉書店、1996 年、p. 8.
2. 安田喜憲「地球と文明の画期」ibid. p. 25.
3. たとえば、今回の学会発表でも、山下和也氏によって、オートポエシス論の視点から社会システムの変革が論じられた。
4. マルグリット・ケネディ「補完通貨としての地域通貨—持続可能な豊かさへの新しい道」『地域再生とネットワーク』昭和堂、2008 年 3 月、pp. 50-84.
5. 北海道栗山町職員 田崎剛氏談（栗山町は 1998 年地域通貨「クリン」を発行し、全国の地域通貨ブームの火付け役となった。）
6. Mathias Weis, Heiko Spitzack: Der Geldkomplex. Haupt. Bern-Stuttgart-Wien 2008. ISBN 978-3-258-07314-9. Mit Beiträgen zum Regionalgeld von Christian Gelleri, Hugo Godschalk, Bernard Lietaer, Gerhard Rösl.
7. Chiemgauer 公式ページより（2009.1.11 更新）  
<http://www.chiemgauer.info/>
8. 徳留佳之『地域通貨全リスト』<http://cc-pr.net/list/>
9. 30 分のサービスに対して 1000 姫を贈呈する。NPO 法人千姫プロジェクトの会員数は 396 人(2009.1 現在)。  
<http://1000hime.jp>
10. 地域通貨国際会議 2004 in 神戸の成果は『地域再生とネットワーク』（昭和堂、2008 年）に収録されている。

11. 和崎宏「地域の人をつなぐツール」『地域をはぐくむネットワーク』昭和堂、2006 年、p. 181.